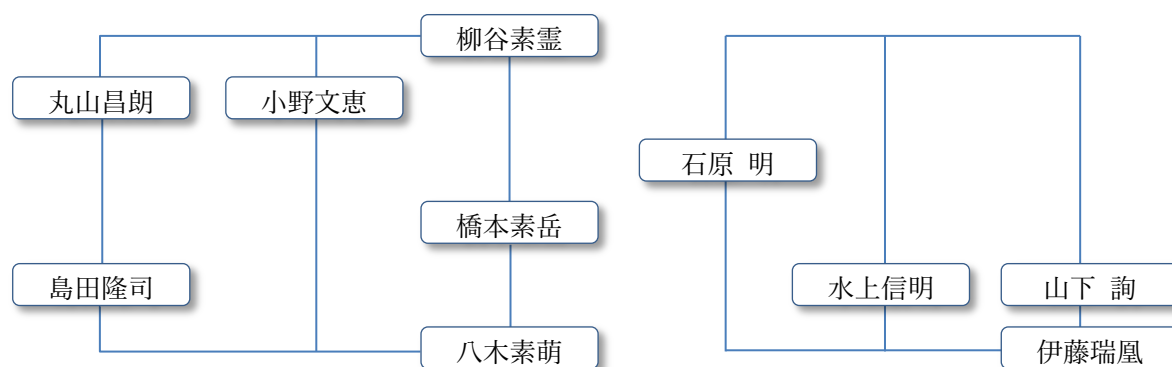


漢法苞徳塾資料	No. 152
区分	論説
タイトル	新経絡的治療について・系譜と特徴
著者	八木素萌
作成日	1994.08.28

◎系譜



小野文恵師には昭和 53 年に東方会に入会して、小野流鍼法を教授された。

石原明師には傷寒論の指導を受けた師の署名した処方箋を処方名の欄を空欄にした俵の形－私が薬方名を自立的に記入できる－で頂戴した。しばしば香港に同行した、師の推薦により『香港・九竜医薬学会永遠会員』となる

橋本素岳師には、昭和 54 年以降「素学会」を組織して教授をお願いして以来、当時の仲間と共に師事している。師は、柳谷素霊師の円熟期に 5 年余り内弟子として、師の薫陶を受けられた。

素靈魂と臨床家魂に関して、九鍼と夢分流打鍼術の実技の薫陶と並んで、素萌ほか「素学会」会員一同は、計り知れないほどのものを受けた。「漢法苞徳塾」は、柳谷素霊の直系を自負する所以である。

山下詢師、昭和 51～53 年の間、先生の主催される杉並での月 1 回の研究会－『鍼灸治療学』『臨床経絡・経穴図解』を本に講義された。当時の経絡治療、古典派の治療の姿の全体像が、理解されるような内容の研究会であった。

島田隆司師には『原塾』創立時に入塾して、『素問』講義を聴講し、『原塾』が組織換えした『内経学会』にも会員となる。『素問』の研究が我流にならないようにしたい為に入塾し入会した。以後、古漢語の書籍を読む場合には訓詁・校勘が非常に重要である事を知る、これは『難経』研究にとっても大きな意味を持った。今日も『内経経会会員』である。

水上信明師には「国 2 リハ」での研修と鍼治療の臨床に大幅な便宜と指導が与えられた。普通の鍼灸院では経験できないような患者の治療が経験できた。それは鍼灸治療が大幅な範囲の疾病に極

めて効果的なものであり、経絡と鍼法に通暁することの重要性を強く認識させたものである。

◎特徴－精神・立場・態度

柳谷素霊師の「鍼灸治療は鍼灸の医学に拠らなければ、その真髄は発揮出来ない。故に、古典に還らなければならない。古典の批判的摂取によって、古典の医学を現代的に甦らせることが必要である。」と呼んで、「経絡的治療」を提唱した精神に立脚しているので、この立場を貫いている。

柳谷素霊師は、「古典の科学化が必要」ともしばしば論じている。この「科学化」とは、古典の記述している医学の観点や達成などを、科学の方法を用いて記述することつまり、明治の文明開化の風潮の折に日本の良き伝統・良き精神・誇るべきものなどを、しばませたり、失ったりしないようにすべきであるという立場から、「和魂洋才」の重要なことが唱えられたが、さしずめ、「漢魂科才」とでも言う所一であろう。

橋本素岳師は、「師は、黙って10年揉みなさい。そうすれば、ひとの身体と言うものが判かる、手ができる。と理屈以上に手ができることの重要性を強調された」と柳谷素霊師の他の面を良く紹介された。「一心不乱に患者の苦しみを取ろうと努めることが、治療を効かせることだ、精神が感応して、治癒力に好ましい影響を与えるからだ。」と言う点も紹介された。九鍼の全ての刺入技術と打鍼術を教授されながら「柳谷先生は各地の名人を訊ねてその技術を習って集められたものだ」とも紹介された。ここには「手をつくれ」「何よりも“医のこころ”こそ重要だ」「伝統技術を駆使しなければならないのだ」などと言い換えられる精神・態度が在る。このような精神と技術を、継承するのだ。これが、我々の立場なのである。

橋本素岳師によれば、「柳谷先生は、ある症状が何臓何経のものか？と一つ一つ弟子に問い掛けられた」と言う。また「黙って10年揉みなさい、そうすれば、人の身体というものが分かる」とも言う。また、言う「ただ虚心に患者の心身に問い、無我夢中に病人に向かってひたすらに治療しなさい、無欲、無我、無心に治療に専心する治療家の姿が、ひたすら病苦を救おうとする様子が、患者の抗病力や回復力を、奮い起こすものだ」と。つまり、術の修練・対象の熟知（理論と実際の両面）・医の心を絶えず教えていたのである。

漢法苞徳塾はこの路線を継承している。それは、素霊精神、つまり、『素問・靈樞・難経の医学』＝『素難医学』の立場を貫くことであり、今日に甦らせることであり、批判的に摂取することであり、「医の心」に誠実に臨床に修練に研究に貫き、「医の術」は修練を重ねて体得すべき「術」の世界であることを知って不断に励み、『素難医学』の真髄を世界に発揮させることである。

◎特徴－理論

漢法医学の診断学に関する記述を見ると、五行・五臓に集約して把握するという特徴がある。病因には五行が配当され、病証には五臓・経絡の病理が配当されて五行的に認識されるという構造になっている。そして、病因の五行は人身の生理機能の五行として現象することが把握されている――

言い換えれば、病因の五行は人身の生理的現象の五行として表現されていると認識されている。

これは、尺皮診においても、面部蒙色においても、八虚診においても、臍傍診にも、募穴診にも、経脈切経診でも、背部診（背候診）でも、脈状診によってもとらえる事ができる。また、病位的にも、「表」位は「太陽」に、「裏」位は「陽明」に、「半表半裏」位は「少陽」に、「陰」位は「三陰」に、明かに反応しているのである。

経脈への反応表現、五臓、五体への反応表現、病臓を表わす反応、病因を指示する反応、病位を示す反応などのように、複層の反応表現が認識できるので、それらの錯綜している反応の意味する所を弁別するのが、診察の眼目である。例えば、この病症は、病因的には「風と寒（木と金）」であり、病臓は「肺」であり、病位は「表」位であり、変動している経脈は「足太陽」「手太陰」「手足陽明」「足少陽」であるが、「手太陰・手陽明」と「足太陽」が主に運用されるべき「経脈」である、という具合に表現されるのである。このように病態認識を表現できるようにすることを「病のイメージングを行なう」と、我々は表現している。

補瀉と治方の決定——補瀉は病の大過・不及を見て、病因、病理的産生物とその所在、病態の緩急、患者の身心の盛衰（身は形と気つまり筋骨と心肺機能。心は情緒気魄）、施術時の運氣循環とそれの人身での現われた表象（穴の開闔）、を勘案して決定する。

◎特徴－手技・手法

「汎用太鍼」運用法を主とする。補助的に三稜鍼・短鍼（4～5分銀鍼）・円鍼を運用する。
「絡刺」不可欠の状況下の用鍼には、三稜鍼の他に毫鍼・短鍼・振子鍼も運用する。

◎ 特徴－治療法